

2018年11月1日

Value Management Innovation

株式会社ブイ・エム・アイ総研

「活・人・経・営[®]」コラム第71回

＜アイデアの源泉＞

今年の夏は猛暑日が続き、今になってその疲れが出てきたという人が案外多いようです。身体がだるくて仕事はかどらない時には、気分転換をして心をリフレッシュし、新たな活力を生み出したいものです。

来年の5月1日から、約30年続いた平成から新元号に変わります。この記念すべき転換期を、人も組織も心をリフレッシュ出来るチャンスとしてとらえて、企業の展望を担うイノベーションを咲かせる絶好の機会にしたいという企業も多いようです。弊社における組織の活性化コンサルティングに於いても、「まずは顧客志向という経営の原点に回帰し、未来に向けて前向きな明るい展望を描くこと」で、人や組織に活力を呼び込みます。

今年の6月29日「働き方改革関連法案」が国会で成立し、7月6日に公布されました。この働き方改革を契機に現在の仕事のやり方を棚おろしし、ビジョンに向けて大幅な生産性向上を狙っていききたいものです。

改善・改革のアイデアは、定型の業務を忙しく遂行している時よりも、個々人それぞれの独自空間でリラックスしている時や、立場や意見の異なる人と心おきなくディスカッションをしている時などに多くが生まれています。真にゆとりのある働き方はイノベーションを咲かせるアイデアの源泉となり、経済成長の呼び水になっていくことでしょう。

＜右脳を活かした問題解決手法＞

アインシュタインが相対性理論を打ち立てる際にも、本人の説明にもとづけば、右脳を活かしたようである。はたからは、相対性理論の発見などのように複雑な定量化や数学を用いる仕事では、白衣に身を包んだ何千人もの科学者が何ヶ月ものあいだ、黒板に何百もの数式を書きつらねたうえに、研究室でのさらなる探求も必要なはずだと想像しがちだ。

かりに当時、今日と同じテクノロジーが使えたとしても、コンピュータが膨大な時間をかけて計算をする必要があったらうと。ところが実際にはアインシュタインは一人目を閉じて、自分が光速で飛ぶ姿を思い浮かべ、地球に到達するまでに何が起きるかを想像しただけだという。

— 出典：「ドロッカー先生の授業」ウィリアム・A・コーン著 有賀裕子訳 —